

資産作りの 新常識

まさおか としゆき
正岡 利之 (MUF G資産形成研究所長)



1982年、三菱信託銀行(現三菱UFJ信託銀行)入社。主に年金や投資信託を中心として、資産運用業務に携わる。2015年より同社で金融教育業務に従事。18年8月より現職。



長期投資の意義を再考する

投 資期間が長期になるほど「リスクが下がる」と、考えている人が意外に多い。しかし、将来の自分がどうなっているかを想像してほしい。1カ月後、1年後、10年後と、遠い先の将来ほど、不確かさを増す。

投資の場合はどうか。図1は、外国株式の収益率が時間の経過に伴って、どのような範囲の中に散らばったかを示している。運用期間が長いほど縦棒も長くなる傾向にあり、それだけ収益率の散らばりが大きくなる。

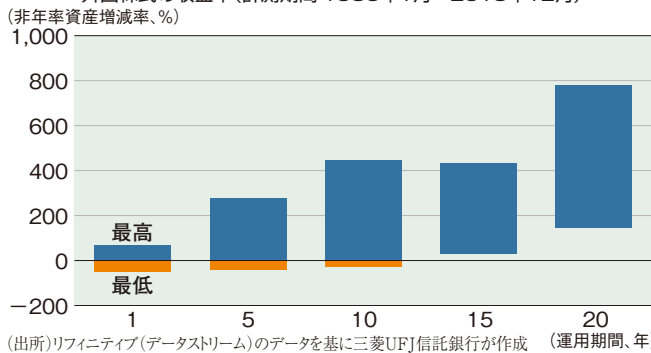
つまり、ばらつき一度合いが大きいほどリスクが高い状態であり、実際には期間が長いほど、不確実性は高まるのだ。

分散がカギ

それでは「長期」に投資するメリットは、なくなるのか。図2は4資産(国内外の株式と国内外の債券)へ均等に投資した場合について、時間の経過に伴って、投資した元本を下回る(元本割れ)比率がどのように変化していくのか、1985年1月から2018年12月までの実績として示したものである。

運用期間を5年とした例で見て

図1 時間の経過に伴って、収益率の散らばりは大きくなる
外国株式の収益率(計測期間:1985年1月~2018年12月)



みよう。

85年1月に行った4資産への投資は、89年12月に5年が経過する。次に85年2月に行った投資は、90年1月に5年が経過する。このように毎月投資を行っていくと、85年1月から18年12月の期間の中で、5年間の投資期間は360パターン存在する。その全パターンの中で、10%強が元本割れをしていくことを示している。

図2を見ると、7年経過の時点では投資元本を割れる比率はかなり小さくなり、10年を経過すると元本割れはほぼゼロに近い水準となっている。投資期間が長期になるほど、元本を下回る比率は小さくなる。

図2 7~8年間投資すると元本割れる可能性はかなり低くなる
4資産均等投資の元本割れ比率(計測期間:1985年1月~2018年12月)



逆に言えば、プラス収益率の領域を中心としたばらつきになっていくのだ。不確実性を示す「リターン」のばらつき」という意味での「リスク」は大きくなる一方で、投資対象が長期的に成長・拡大することによって、その成果を受けられる可能性は高まっていく。従って、投資対象を適切に分散することで、個別銘柄に起因するリスクを下げておくことも大切だ。